

ここに「手を抜けば、手がかかる」という言葉がある。今、やらなければ、また今、言わなければ、結果的に手がかかってしまうという教育に対する戒めの言葉であろう。

我々は、自ら考え、自ら判断し、主体的に行動ができる、言わば手のかからない自立した子どもに最終的にしようと、今は手をかけている。学年目標や学級目標、また教科目標の達成をめざし、日々、意図的・計画的に生活指導や学習指導を行っていることから説明できる。ここで考えたいことは、手をかけていることが、本当に手をかけていると言えるかということである。手をかければかけるほど、手がかかる子どもになってきていないか気を付けたい。

例えば、毎日、次の時間の準備をして休憩をするように言っていると。4月から2ヶ月、守られないことにそろそろ担任は、いらいらする。担任は、次の学習がすぐ始められるようにという思いで約束した学級ルールとらえている。いつも守らないA君がいつの間にか、この学級の困り者に入っていないだろうか。この例には、二つ気がかりなことがある。まず、準備をしていたら、学習がすぐ始められるか、そしてそれが本当に納得できたかということである。着座して、子どもが机の中から教科書やノートを出すのに何秒かかるだろうか。二つ目は、学級のルールとして本当に約束したことだろうか。教師は「はい、約束しましたよ。」と結構一方的に約束する。高学年であれば、何人かは心の中で「身勝手」と思うに違いない。

ここで手を抜いてはいけないことは、授業を時間とおり始めることであり、時間とおり始める内容を子どもたちに話したり話し合ったりすることである。また、教師の言い分を勝手に、約束という言葉に置き換え、簡単に学級のルールにしないことである。

指導という言葉は、学校生活では頻繁に使い、言い古されているが本当に難しい。分かるようで分からない。具体的な場面で指導してくださいと言われ、はたと困ることがある。注意はできる。次につなげることがなかなかできない。手を抜いた指導はしていないはずである。しかし、結果的に手がかかるのであれば、手の入れ方を再考しなければならない。

押さえつけた指導は、最終的に手がかかることが多いことから、もしかしたら手抜き指導かもしれない。本当に子どもが納得し、言葉が変わり、行動が変わる指導をめざしたい。そして、次の学年や中学校に確実につながることが実感できれば、自立に向かう子どもが育つと考える。(芝)

